

高温に対する農作物等の当面の管理について

令和 7年 7月 22日
秋田県農作物異常気象対策本部
農作物異常気象対策指導班長

共通事項

<農作業中の熱中症対策>

- 作業は、日中の気温の高い時間帯を避けて行うとともに、休憩をこまめにとり、作業時間を短くするなどの工夫をする。特に、気温が高くなりやすいハウス等の施設内での作業では注意する。
- 作業場所には日よけを設けるなど、できるだけ日陰で作業をするように努める。
- 喉の渇きを感じる前に、こまめに水分や塩分を補給する。
- 帽子や吸湿速乾性の衣服、空調服の着用のほか、送風機を活用する。
- 屋内では、遮光や断熱材の施工等により、作業施設内の温度上昇を抑えるとともに、風通しを良くして室内の換気に努める。
- 単独での作業は避け、複数人で作業を行うよう心がける。また、時間を決めて連絡を取り合う。
- 熱中症が疑われる場合は作業を中断し、涼しい環境へ避難し水分を補給するなど、応急処置に努める。症状が改善しない場合は、早めに医療機関を受診する。

水 稲

(1) 水管理の徹底

- 水管理の徹底により稲の活力を維持する。登熟が高温条件下で経過すると白未熟粒やくさび米（黒点症状米）等の被害粒の発生が多くなることから、水管理を徹底して被害軽減に努める。
 - ・ 出穂から10日間は湛水管理（水深5～6cm程度^{*1}）とし、その後は間断かん水を基本とする。ただし、最高気温が30℃以上になる場合は、用水確保が可能であれば、かけ流しかん水を行い地温を下げ、根の機能減退を防止する。
 - *1：水深が浅いと水温が上昇しやすくなるため水深はしっかり確保する。
 - ・ かけ流しかん水が困難な地域では、開花期後は落水期間の短い間断かん水や午前にかん水するなど、水分供給と地温の低下に努める。
 - ・ フェーン現象等で乾燥した風の強い日は、湛水管理を行い、蒸散による水分の消耗を軽減する。
 - ・ 早期に落水すると葉色の低下、枯れ上がり、根の機能減退につながるため、落水時期は出穂後30日以降とする。
- カドミウム含有米の発生が懸念される地域で、「あきたこまちR」以外の品種では、カドミウムの吸収を抑制するために、出穂前後各3週間は常時水を張り、田面が空気に触れないようにする。

＜水不足等で用水の確保が難しい場合＞

- ・ 溝切り跡への通水等により、土壤水分を補充し、夜間の地温低下を図る。ただし、穂揃期の前後は稲の吸水量が大きいため、かん水不足で稲が萎れないよう注意する。
- ・ 用水が地域全体に行き渡るよう、こまめな水回りを行い、ほ場全体に水が行き渡ったら速やかに水口を止める。また、漏水がないよう畦畔の補修に努める。
- ・ 地域農家や関係機関と協力して節水管理に努め、入水時間を申し合わせるなど、計画的な用水の供給に努める。

（２）斑点米カメムシ類防除

- 高温条件では、斑点米カメムシ類の活動が活発になると予想されることから、以下の対策を徹底する。
 - ・ 稲の出穂期（ほ場全体の40～50%が出穂した日）の把握に努め、出穂期10日後頃にアルバリン剤又はスタークル剤の茎葉散布剤を畦畔を含めたほ場全体に散布する。また、出穂期10日後頃の茎葉散布剤の散布当日から7日後までに畦畔や農道の草刈りを必ず行う。
 - ・ 水田内に生じたノビエやホタルイ等のカヤツリグサ科雑草が発生しているほ場、イネ科植物が主体の牧草地や休耕田等に隣接しているほ場では、出穂期10日後頃に加えて同24日後頃にも茎葉散布剤を散布する。

大 豆

（１）開花後の水分供給

- 大豆は、開花～子実肥大期にかけて水分を多く必要とし、乾燥が続くと減収することがあるため、暗きょ栓の操作や地下かんがいシステムの利用により、大豆の好適な地下水位（40cm程度）の保持に努める。
 - ＜暗きょの操作＞
 - ・ 暗きょ栓を閉めて土壤中の水分の保持に努める。ただし、まとまった降雨がある場合は、暗きょ栓を開いて排水を図る。
 - ＜地下かんがいシステムが備わっているほ場＞
 - ・ 暗きょ栓を閉めて地下水位を40cmに設定し、降雨を土壤に貯留するように努める。
 - ・ 地下かんがいは、晴天が1週間以上続き土が白く乾燥している場合や日中に大豆の葉が立ち、半分以上の葉で裏面が見える等の状態を目安に実施する。この時の地下水位は、20～30cm程度に設定し、1日給水した後、暗きょ栓を開放して排水する。
- 著しい高温少雨に遭遇した場合、畝間かん水や明きょへのかん水等の対策をするが、十分な用水量が確保でき、速やかな排水が行えるほ場など実施可能な条件が限られるため、ほ場条件を確認した上で実施を検討する。
 - ＜畝間かん水の日安と留意点＞
 - ・ 畝間かん水は、晴天が1週間以上続き土が白く乾燥している場合や日中に大豆の葉が立ち、半分以上の葉で裏面が見える等の状態を目安に実施する。

- ・ 30 a 以上の大きなほ場の場合は、ほ場を2～3区画程度に分け、1日1区画ずつ2～3日に分けて実施し、畝の崩壊と水口付近の湿害を防ぐ。ほ場（区画）全体に水が行き渡ったら水口をしっかりと止め、速やかに排水する。なお、かん水は、気温・地温が低下する朝夕の時間帯に行う。
- ・ ただし、水回りが悪いほ場や速やかな排水を行えないほ場では、湿害等が発生することがあるため実施しない。

＜明きょへのかん水の目安と留意点＞

- ・ 排水口を閉じ、明きょ全体に水を行き渡らせ、その後は速やかに排水する。

（２）病虫害防除の徹底

- 高温条件では、害虫の発生が多くなることから、ほ場をよく観察して適切な防除に努める。
- 高温の影響で大豆の開花時期が早まる可能性があるため、開花時期を確認し、紫斑病の防除を適期に行う。（１回目の防除時期：開花期20～30日後）

野 菜

（１）適切なかん水、換気、遮光等の実施

- 露地野菜では、気温の低い早朝又は夕方の時間帯にかん水を行う。畝間かん水する場合は、停滞水が無いように注意する。
- 施設野菜では、天窓及び施設側面の開放や換気扇を活用して十分に換気するとともに、遮光ネットによる被覆等により、施設内の温度上昇を防ぐ。
- 敷きわら等により、土壌表面からの水分蒸発と地温上昇の防止に努める。
- 収穫は、気温の低い時間帯に行い、速やかに調製・出荷するか、予冷库に入れるなど、高温による品質低下を防ぐ。

（２）病虫害防除の徹底

- 高温乾燥時は、ハダニ類、アブラムシ類、アザミウマ類等の害虫が発生しやすいので、発生動向に十分注意し適期防除を行う。特に、開花期が8月以降となるえだまめの作型では、ダイズサヤタマバエの発生が多くなるため、適期防除に努める。

（３）秋冬野菜の管理の徹底

- 秋冬野菜では、育苗中の温度、かん水、病虫害に注意して適切な管理を行う。高温乾燥時の播種及び定植は、発芽率の低下や苗の活着不良につながるため、できるだけ避けるようにする。定植後は、必要に応じてかん水を行う。

花 き

（１）適切な換気、遮光等による品質確保

- 施設栽培は、露地栽培に比べ高温による生育障害を受けやすいので、換気扇等を利用した強制換気により、日中の施設内温度の上昇を極力抑える。
- 寒冷紗等による遮光（遮光率30～50%を目安とする）を行い、葉温や地温を下げる。
- かん水は、施設・露地栽培ともに気温の低い早朝又は夕方の時間帯に行う。植物体の温度を下げる目的で、施設の細霧冷房や、露地ほ場で軽く散水することも有効である。

- 収穫は、気温の低い早朝に行い、高温による萎れなどの品質低下が発生しないようにする。

(2) 病虫害防除の徹底

- ハダニ類、アザミウマ類、アブラムシ類などが発生しやすいので、よく観察して防除を徹底する。なお、高温時に薬剤散布を行うと薬害が発生するおそれがあるため、気温の低い早朝又は夕方時間帯に行う。

果 樹

(1) 果樹園の高温時の管理

- 収穫期が近いりんご、もも等の早生品種は、着色不良を防止するため、樹冠内の光環境の改善、反射シートを活用して着色を促す。
- 着色の遅延によって収穫時期が遅れ、果実が過熟とならないよう、糖度や食味を確かめつつ、適期収穫に努める。
- 果実の日焼けが発生しやすい園地では、各種資材による遮光等の対策をとる。

(2) 病虫害防除の徹底

- 高温乾燥時は、ハダニ類などが発生しやすいため園地をよく観察し、適切な防除を行う。
- 薬剤散布は、高温時に行うと薬害が発生するおそれがあるため、気温の低い早朝又は夕方時間帯に行う。

畜 産

- 遮光ネットの設置などにより、直射日光が畜舎内に入らないようにし、畜舎内の温度上昇の緩和を図る。
- 換気扇の活用などにより畜舎内の風通しを良くし、送風機の活用により家畜に風が当たるようにするとともに、夜間の換気によって畜舎内の温度を下げ、涼しい環境をつくる。
- 飼育密度を下げたり、散水・散霧を行い、家畜の体表温度の低下を図る。
- 高温下では、家畜の食欲が低下するほか、飼料や飲み水の品質低下が発生しやすくなることから、良質で消化の良い飼料を小分けにして給与したり、新鮮な水の常時給与を徹底するとともに、家畜の健康状態や飼槽・水飲み場の状態をこまめに確認する。

飼料作物

- 放牧利用の草地については、草地の面積や草量を考慮して、過剰な頭数の放牧を行わないようにし、草勢の維持に努める。
- 採草利用の草地については、高温及び干ばつが予想される場合は、過度の刈りや短い間隔での刈取りを避け、草勢の維持に努める。
- 夏枯れなどにより草勢の低下が見られた場合には、必要に応じ追播など適確な維持管理作業を行う。
- 飼料用トウモロコシについては、小規模でかん水が可能な場合は、かん水を行う。